

展覧会「松坂屋創業410周年・松坂屋美術館開館30周年記念 うつくしき^{わのいろ}和色の世界 KIMONO」を開催して

荘加 直子

はじめに

松坂屋美術館では2021年10月2日から11月21日に松坂屋が所蔵する¹着物の生地「色」をテーマにした展覧会「うつくしき^{わのいろ}和色の世界 KIMONO」を開催した。松坂屋は、慶長16年（1611）、織田信長の家臣であった伊藤蘭丸祐道が武士の身分を捨て、名古屋の本町に呉服小間物問屋の「伊藤屋」を始め、創業した。元文元年（1736）には呉服太物商となり、元文5年（1740）には尾張徳川家の呉服御用達になった。明治43年（1910）に百貨店に業態転換をし、令和3年（2021）に創業から数えて410年となり、平成3年（1991）に開館した松坂屋美術館も30周年となった。

明治以降、松坂屋は着物の販売を商売の中心にし、他の呉服店と図案を競うなどして、新製品を生み出した。松坂屋ではより良い図案製作を模索し、担当者が、江戸時代までの染織品の持つ古典的な「模様」や「色」に注目するようになり、昭和6年（1931）から14年にかけて小袖などの染織品を収集した。収集した染織品は長らく呉服の新製品のデザインソースとして使われてきた。平成以降、その役割を終えたが、美術品として公開することが望まれており、本企画を開催することになった。

松坂屋はコレクション収集に際し、江戸時代以前の染織品の「模様」と「色」に着目した。そのなかで、これまで、小袖に展開した「模様」を中心とした展覧会は、少なからず催されてきた。しかし、「模様」とともに近世に開花した服飾の「色」については、管見したところ展覧会が開催された履歴は確認できず、十分に光が当てられてきたとはいえない。江戸時代までの「色」は、天然染料から得られた日本独自の美しい名前を持つ。その日本独自の色を「和色（わのいろ）」とし、生地「色」に着目し小袖など約160点を、テーマを設定し3章に分けて構成し本展を企画した。

筆者は、展覧会構成や作品の解説、江戸時代の染色などについては展覧会図録²や別稿³にて紹介したので、本稿では、松坂屋が染織品を収集した時期の活動を中心に、松坂屋が必要とした江戸時代の着物の「色」について解明できたことを中心に述べていきたい。

1、「色」の魅力

今回、展覧会を企画するにあたり、色の中で白、青、緑、黄、黒、紫、赤と染め分けを選び3つの章にわけた。第1章は「白をもとめて」とし、生地や織り方の異なる小袖を展示した。江戸時代に入り「色」として一般的に使われるようになった「白」は糸を晒すことなどで白さを求め「色」として確立した。また第2章は「広がる染色の世界」とし、江戸時代の染色技法書である『紺屋茶染口伝書』⁴などを読み解いた。第3章では「華やぎ艶めく色」として江戸時代の女性が興味を持った「色」に着目した。江戸時代前期の慶安4年（1651）発刊『聞書秘伝抄』⁵、中期の元禄5年（1692）に『ゑ入女重寶記』⁶、『女小學』⁷が享保10年（1725）に刊行されているが、それらには、女性が興味を持った「色」と、その「色」を別の材料で「似せ」た色の染め方が紹介されていた。

第2章で参考にした『紺屋茶染口伝書』には、緑、黒について染め方が書かれている。それぞれ、作品調査をする中、この染め方を実際の作品の中で確認できたので紹介する。緑であるときさの染め方には、「したそめ はな色にして。かりやす五六へんつけて。ただし、一へん一へんにてほしつけ申し候。さてうえをばつばきのあくをかけとめもうしそろう」とある。花色である青（藍）を下染めし、その

上に黄色である雁安を重ね、その都度干して、最後に椿の灰汁（アルカリ）によって色を止めるとある。藍と雁安の染める回数で緑の濃淡がでてき、「鶉色」、「萌黄」、「木賊」、「緑青」、などの色が生み出される。出品した緑の「小袖 鉄線唐花模様（図1）」の生地を顕微鏡カメラで確認する（図2）と染めむらが確認でき、青色と黄色を重ねることで緑色が生み出されることが確認できる。



図1 「小袖 鉄線唐花模様」

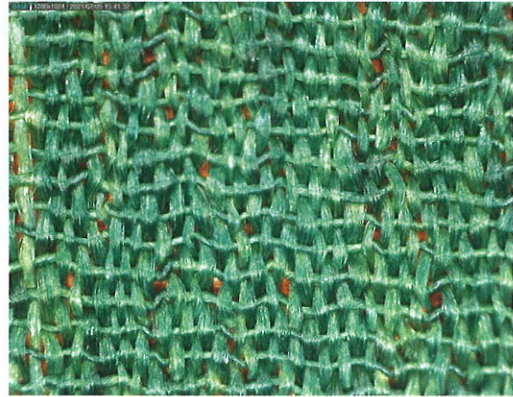


図2 顕微鏡写真

黒については技法書に興味深い記述がある。寛文6年（1666）の『紺屋茶染口伝書』には、「黒」である「憲法」の染め方が以下のように紹介されている。「17 けんぼう かわ三しおつけて。くろみ一ぺんかけ。ぬれながら水にてすすぎほしつけて。またかわ三しおそめて、くろみをかけ。右のごとくほしつけて。くりかえし二三へんほどそめつけもうしそうろう。」で内容は、もも皮（やまものかわ）三度つけて。くろみ（かね）一回かけ。ぬれながら水ですすぎほして。また三度そめて、くろみをかけ。右のごとく（ぬれながら水にてすすぎ）ほしつけて。くりかえし三回ほどそめつけるのである。展覧会で展示映像を製作するにあたり、この技法の再現をして染めた生地は、この「小袖 雪輪に花鳥帯模様（図3）」と同じ色であった。顕微鏡カメラでみる（図4）と染めむらが確認できることから、何度も繰り返し「色」を生み出していることが確認できる。



図3 「小袖 雪輪に花鳥帯模様」

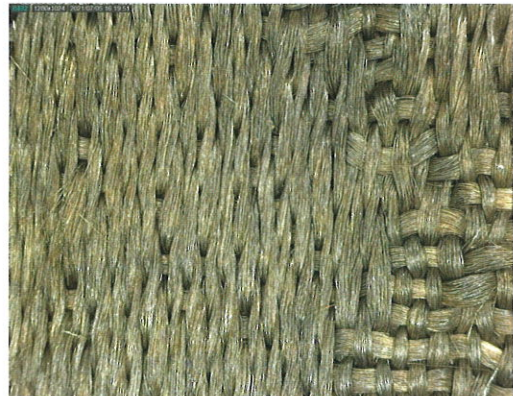


図4 顕微鏡写真

一方、元禄9年（1696）発刊の『当世染物鑑』⁸には、「けんぼう染め下染はないろ二してももかわ二而四編染。金くろみかけすすぎてよし。右之とをり二而くろくなりもうすまでそめテよし。」とあり、内容は下染めは花色（青）にしてももかわ（やまもの皮）の上に四回染め、黒味をかけてすすぐのが

よい。右このとおりに黒くなるまで染めてよいとある。要は、生地に藍を下染めしていることが紹介されている。それは、この「裂 垣根に瓢花模様（図5）」の端に藍の色を確認することができたので、黒の部分を顕鏡カメラでみてみると、黒の部分に藍の下染め（図6）を確認することができる。



図5 「裂 垣根に瓢花模様」

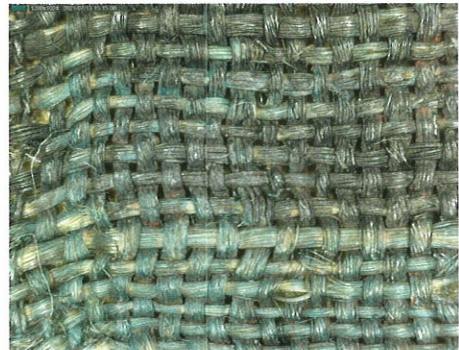


図6 顕鏡写真

また、同じ麻の生地で子供用の「振袖 花束に卍立涌模様（図7）」は藍の下染めが確認できないので（図8）、図3の小袖と同様の染め方であろうと推測される。この振袖は平戸藩松浦家の旧蔵品である。染め方の違いが身分などから起こる可能性があるのかもしれないが、藍の下染めがあるのとない「けんぼう」の染め方もあったことが確認できる。



図7 「振袖 花束に卍立涌模様」

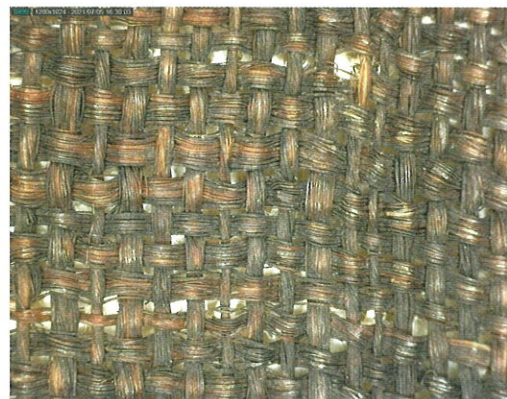


図8 顕鏡写真

また、第3章で紹介した「色」について、参考にした『聞書秘伝抄』には「紫」が以下のように紹介されている。「本紫」という紫根染めと、蘇芳による「似せ紫」の染め方である。そこには、

一、ほんむらさきのそめようの事

まづ、したちをつばきのあくにてそめ。むらさきね一かしらを。ぬるぬるとしたるさゆにて。もみいだし。一たんを五かしらほどのねにてそむるなり。べにをおろしてそのべにをわかし。にへたるうちにそむるなり。一かしらにてそめては又つばきのあきをかくるなり。二かしらめよりうすへ入て。つきてゆるゆにてべにをおろしわかしてそめ。もし色くろめにならばすをすこしさせばあかめになる。

二、にせむらさきのそめようの事

すわう一片つねに物をそめるごとくにせんじいだし。すきみやうばんを入つねのごとくあわせおけ

へ入。一日一夜人のあるかぬところに。をきいさせて。うはずみをとりになにも、でもそめ物をしたぞめをしてほし。その、ちにしやうみのしるにたはこばを一合いれてよくあわせてそむるなり。さて又ほしてのちにごりみやうばんを一匆こにしてあつきゆに入かきたていろすきるほどそれにて。うはぞめをし又ならひ有湯たくさんにして。いくたびもいろはこのみのごとし。そめにゆすくなくときはむらそめあるものなり。⁹

とあり、江戸時代前期の慶安年間に一部の階級ではあるものの、女性がすでに色への興味を持っていたことと、似せてでも入手したい色が存在したことが紹介できた。

「色」がテーマであったので、「白」の色のことや、染色技法、そして当時の女性がどのように「色」の興味をもっていたかという視点で展覧会を企画し、着物に江戸時代にどのように「色」が用いられ、文様とともに華やかな服飾の世界をつくりあげたのかを紹介した。「色」をテーマにしたことで、今までの着物の展覧会で展示される機会が少ない江戸時代後期の着物が多く展示できた。

2、松坂屋の求めた色

松坂屋は、昭和戦前期に江戸時代以前の染織品の「色」と「模様」に着目してコレクション収集をしたと述べたが、この収集は新たな着物の製作のためである。そこで、松坂屋が江戸時代の「色」をどのように活用したかという視点で呉服製作の色の役割について考察した。方法は、春と秋に実施されてきた「流行会」のそれぞれの流行色と図案の（図9、10、11、12）中で、昭和8年（1933）の「明華模様」に焦点をあててみる。

染織日出新聞の昭和8年1月1日14面にその年の松坂屋のテーマの「明華模様」が紹介されている。春の色彩については、「この春の色調は淡くなつて寧ろ夏のように白色が活躍する白地でも配彩色が巧みに階調を保つと白とは見られない感の表現ができよう」¹⁰とある。一方、染織日出新聞の昭和8年5月27日2面に秋冬について「明華模様」が紹介されている。ここでは、春とは違い、標準色、構図、技法について書かれている。その中の標準色の部分をみると、

標準色には、熱意とまことを表現する、真紅。叡智の閃きを思はしめる白熱。静操の深さを偲ぶ深紫の三色を選定した、凡そ染織物が前秋以来明朗な配色を要求した結果、地色は著しく淡色となり、つひには白地を尊重するほど極端に走り情動的に夏物に到つたが、作家は明快、即ち淡色と誤解して稍もすれば柄配色まで淡きに失し夢のように薄ぼやけて全體に締まりのない力弱き表現に陥つた、これを是正する意味において殊に秋冬物には濃色の必要上極端な濃色と白に近い極端な淡色との対比—濃度高く麗はしい九十%のものと十%の淡色とをコントラストして其處に奏でいづる明快にして力強い配彩を得んことを主張してゐる勿論主色は濃淡何れを選ぶも自由である且つ、最近の高級服飾は書間と□も帝國ホテルその他ホールにおいて人口ライトに照明されて観賞される場合が多いこと、近代建築豪壮な背景や大衆の中において相當距離を隔て、眺めてもよく明快に際立つた麗姿として表現する手法として濃淡色の対比は必要であり實際家は既に十分これを認識して應用せんとしてゐる¹¹

このあとに、構図や技法の紹介がされており、参考にする江戸時代の小袖の時代などであるが、「色」については、標準色としてテーマ設定をしていることから重要視していることがうかがえる。



図9 「明華模様」題字



図10 「明華模様 (春)」

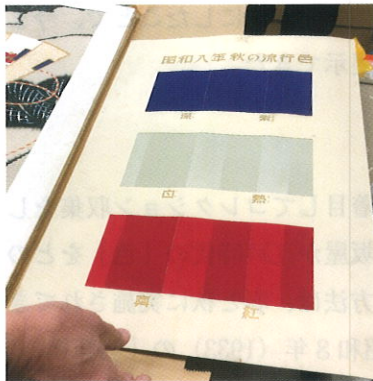


図11 明華模様 秋の流行色

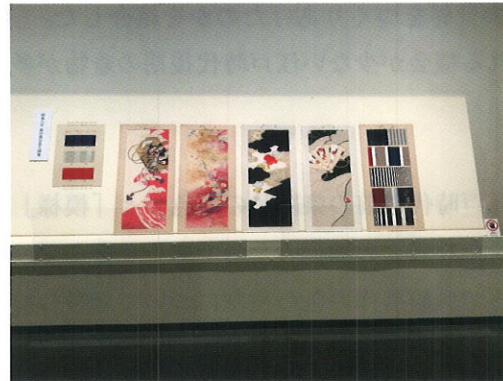


図12 「明華模様 (秋)」

3、染織史料としての「小袖雛形本」の中の「色」

「小袖雛形本」¹²とは『原色染織大辞典』¹³には「雛形」として、「実物を寸法のみ縮小して作った模型の類、手本とするものこと。染織関係では、江戸時代に木印刷で出版された服飾類の見本帳を指し、時に肉筆による図案帳も含む。衣裳雛形・文様雛形・小袖文様雛形などとも呼ぶ。今日のファッションブックに相当し、当時の服飾文様の流行の変化や加工法の進展を知る貴重な研究資料。現在伝存が明らかな版本は寛文6年(1666)刊の『御ひいなかた』から文政3年(1820)刊の『万歳ひいなかた』まで、再販を除いて百二十余种。実際には百数十種を超えたと推定される」¹⁴と掲載されている。ここでは、本展に出品した小袖雛形本の中に「色」について検証してみる。

「小袖雛形本」の中で文字情報としても「色」が記載されているが色別に発刊されたものがある。それは『都雛形』¹⁵である。色別の五巻にて前後を1図と数えると69図を掲載し、一は紅、二は黒、三は鬱金と白、四は紫と浅葱、五は萌黄・憲房である。

この中の萌黄色の中の一つ(図13)を読み解くと右頁には背面、模様と加工法と地色が書かれる。

地もへぎ 雪に水仙のもよう雪
 紅かのご白水仙のはなはいずれも白
 染わり包はあさぎかのご花はつぼみぬい
 すこし入れて

左頁には全面、加工法が書かれる。
 内容は、前おなじところ 染下地もやう
 とある。

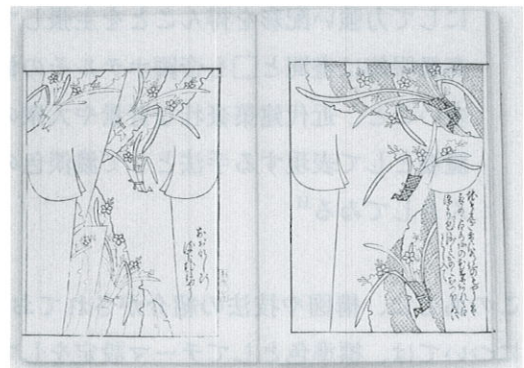


図13 『都雛形』

また、様々な「色」が記載された小袖雛形本が多く出版された江戸中期のもので、検証してみる。

『正徳雛形』¹⁶は、正徳3年正月、八文字屋八左衛門により、5巻で小袖図96図と紋189図が掲載されて発刊されている。絵師は西川祐信。第1巻は御所風・お屋敷風、第2巻は町風・傾城風、第3巻は遊女風・風呂屋風、第4巻は若衆風・野郎風と着用者により区分けして編集されている。地色などの特徴については、上・下など細かく書かれており、単色ではないことが特徴であるし、加工法が2つ掲載されるものもある。この中の一つ（図14）を読み解くと

右頁の第三番には、

地あさぎ水白く 水すじきんしぬい
山ぶきかのこ入 花ぬい葉はもへぎ
又ゆふぜん染にして 水かすりのり
山吹いろいろの小さぞめか

左頁の第四番には、

夕顔のもやう地白 たかへい茶はしらはこん
ゆふがほの花と葉は
いづれもゆふぜん染 ほかし入れ
やねはかのこ つるはこんのほそ染

とあり、細かい模様の色まで技法とともに書かれている。

『当世模様 宿の梅』¹⁷は享保15年（1730）9月、柏原清右衛門により上中下三冊で112図が掲載され発刊されている。袖の下に地色と加工法が書かれている。模様構成は総模様や腰高模様が比較的好い。地色に使われている色は40種ほどで茶系統が多様多様にある。丁字茶、中色、花色、白、すみる茶、とび色、浅黄などが多く使われている。この中の茶系統の一つ（図15）を読み解くと

九十 地すみる茶またとび残らず白あがり
かけじ周墨入 花所々ぬい入
九十一 萩に地かみ乃もやう
はぎゆうせん 小色入り 地かみ白上り
周り墨入地すみる茶
又はあさぎ白茶にても

とあり、地味なすみる茶などが使われていることが確認できる。

『当世模様 雛形母子草』¹⁸は、宝暦4年正月、菊屋喜兵衛により上中下三冊で80図が掲載され刊行されている。文字情報は模様の名前と地色と加工の説明が書かれている。使用されている地色は15種ほどで、花色、憲房、千草色などが比較的よく確認できる。この中の一つを読み解くと（図16）

四番

光林雪松（くわうりんゆきまつ）

地けんほうすぬひ 又白あげかのこに色さし

五番

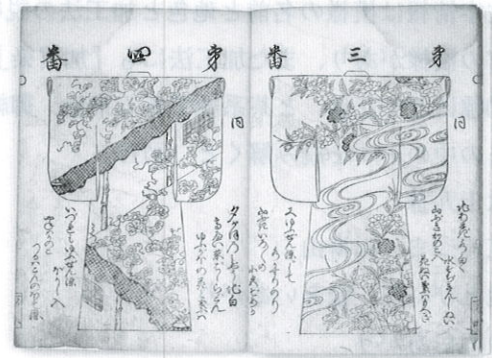


図14 『正徳雛形』3, 4番

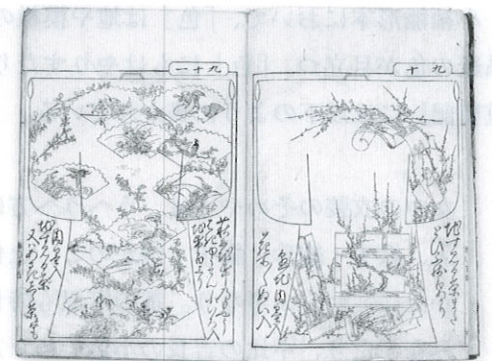


図15 『当世模様 宿の梅』90, 91番

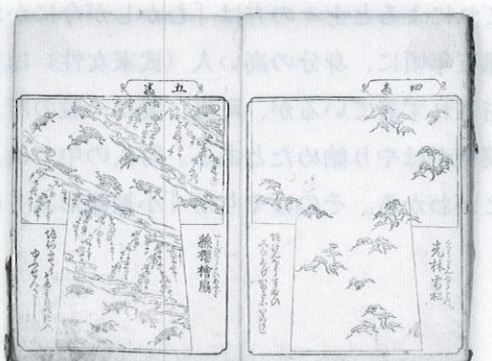


図16 『当世模様 雛形母子草』4, 5番

線櫻檜扇（いとざくらひあうぎ）

地何にても そめわけに入り

ゆふせんさし

とあり、四番は2つの字の色の提案、五番は染め分けと書かれている。

『雛形春日山』¹⁹は、明和5年正月、菊屋喜兵衛により上中下三冊で94図が掲載され刊行されている。文字情報は模様の名前と地色と加工法の説明が書かれている。この雛形には「江戸褌」「惣江戸褌」などの模様があり、また加工法にも「加賀染」「茶屋染」「しもふり染」などの言葉が確認できる。地色は20種ほどで花色、と茶系統である茶色、御納戸茶、憲房、とび茶、こび茶などが確認できる。

この中の一つを読み解くと（図17）

六十九番

江戸つま 衣掛山

地とびいろ 松あいあがり

きぬ白あがり

だてもん 加賀友ぜん

七十番

菊水

地はないろ 黒いときんし

あさぎ すぬい

とある。

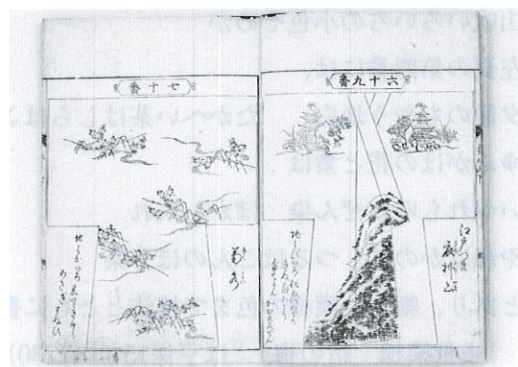


図17 『雛形春日山』 69, 70番

小袖雛形本において、「色」は地や模様の「色」として紹介されるが、時代が下るとともに地味な茶系統の色が目立つ。「色」にもはやりすたりがあったようである。元禄5年（1692）年発刊の『忍入女重寶記』には以下のように書かれている。

女中の衣装のそめやうは、うへうへ方はむかしが今にかわる事もなく、地あか、地しろのぬいはく入、緞子・繻珍・綸子・惣かのこ、上代風にて今の代にこれをきれば、屋敷がた・田舎風とて京のかたにてわらふ事なり。都の町風も時世にうつりかわりて、時々のはやりそめも五年か八年の間にみなすたり、中比の吉長の小色そめ・友禅そめの丸つくし、上経八文字屋ぞめの山みち・す崎、下京そめのうちだしかのこ、今みればはやふるめかしく初心なり。此のころは地茶・地白かたのもやうやうやくはやり出たけれども、これも又いつしかすたるべし（下線筆者）²⁰

これによると上々の方は「むかしが今にかわる事もなく、地あか、地しろのぬいはく入り」とあり、元禄五年頃に、身分の高い人（武家女性）は昔も今も地色が赤、白の繻箔が加工された小袖をはやりに左右されず着ているが、町風、要は一般の町人の中では、生地の色が茶や白で、形をつかった「かた」の模様がはやり始めたとある。町人の中では、衣服のはやりすたりが五年から八年の期間で興っていることがわかる。そのはやりが「小袖雛形本」に書かれた「色」にも影響をあたえているのであろう。

まとめ

本稿では、自身が企画した展覧会を基に見出した知見などを述べてきた。現在、天然染料による日本の染色は「草木染め」といわれ、あまり一般的ではなく、化学染料による染色が大半を占めている。しかし、化学染料がヨーロッパから伝わったのは明治に入ってからで、日本独自の「色」と「色の名前」の使用されてきた年数にはとうてい及ばない。そのことは科学染料が導入されて着物の生産などが安易になったにも関わらず、時間をさほど経ず昭和初期に江戸時代までの古典を求めたことにつながるであろう。

本展は「色」をテーマにするという前例のない着物の展覧会であったが、それぞれの「色」の歴史的背景や人々の興味といった新たな着物の紹介の切り口を見出すことができた。模様では特徴を見出せず、展示機会の少ない江戸時代後期の着物を展示できた。これらを総じて着物の新たな視点を紹介する画期的な展覧会にすることができた。今後も、様々な視点で松坂屋コレクションの染織品を調査・研究し、解明できたことを展覧会などで公開し、コレクションの価値付けと着物文化の紹介に貢献していきたい。

(キーワード：松坂屋コレクション、松坂屋美術館、着物、染色、小袖雛形本)

(2014年度家政学研究科・2018年度人間生活学研究科修了生、松坂屋美術館学芸員)

※掲載作品の所蔵はすべて松坂屋コレクション (一般財団法人J.フロントリテイリング史料館)

- 1 松坂屋が所蔵する染織品は松坂屋京都染織参考館に2010年まで所蔵されており、現在は一般財団法人J.フロントリテイリング史料館と名古屋博物館に分蔵され松坂屋コレクションとよばれている。
- 2 荘加直子、展覧会図録「松坂屋創業410周年・松坂屋美術館開館30周年記念 うつくしき^{わのいろ}和色の世界 KIMONO」、松坂屋美術館、2021年。
- 3 荘加直子、解説「松坂屋創業410周年・松坂屋美術館開館30周年記念 うつくしき^{わのいろ}和色の世界 KIMONO」、国際服飾学会誌、No60号、国際服飾学会、2022年、4～11ページ。
- 4 『紺屋茶染口伝書』、絵筆屋勘右衛門、1666年。(後藤捷一・山川隆平、『染料植物譜』、はくおう社、1972年に所収)
- 5 『聞書秘伝書抄(慶安4年発刊)』については、飯塚容子・國分暁子・吉井始子「萬聞書秘傳についての研究(その一) 付録 萬聞書秘傳一編刻と校異一」、『東京家政学院大学紀要』、第16号、1976年、23～106ページ。後藤捷一・山川隆平、『染料植物譜』、はくおう社、1972年などの内容を参考にした。
- 6 『姦入女重宝記(元禄5年)』については、有馬澄子・若杉哲夫・西垣賀子執筆『東横学園女子短期大学 女性文化研究所叢書 第三輯 姦入女重宝記』、東横学園女子短期大学、1989年。
- 7 『女小學(享保10年)』については後藤捷一・山川隆平、『染料植物譜』、はくおう社、1972年に所収。
- 8 『当世染物鑑』、野田屋利兵衛、1696年。(後藤捷一・山川隆平、『染料植物譜』、はくおう社、1972年に所収)
- 9 後藤捷一・山川隆平、『染料植物譜』、はくおう社、1972年、566～557ページ。
- 10 染織日出新聞 昭和8年(1933)1月1日14面。
- 11 染織日出新聞 昭和8年(1933)5月27日2面。
- 12 「雛形本」については小袖雛形本、雛形本などと呼称は研究者により様々である。本稿では「小袖雛形本」と表記する。
- 13 編集 板倉寿郎 野村喜八 元井能、『原色染織大辞典』、淡交社、1977年。
- 14 前掲註13、874ページ。
- 15 『都雛形』発刊社者不明、1691年
- 16 『正徳雛形』、八文字屋八左衛門、1713年。
- 17 『当世模様雛形 宿の梅』、柏原清右衛門、1730年。
- 18 『雛形母子草』、菊屋喜兵衛、1754年。
- 19 『雛形春日山』、菊屋喜兵衛、1768年。
- 20 前掲註6、25～26ページ。